

書評

BOOK REVIEW

松永伸太郎 著

『アニメーターはどう働いているのか』

——集まって働くフリーランサーたちの労働社会学

阿部 真大

本書の筆者である松永伸太郎は、「第13回日本修士論文賞」（主催：三重大学出版会）を受賞した2014年度の修士論文（「アニメーターの労働問題と職業規範——「職人」的規範と「クリエイター」的規範がもたらす仕事の論理と労働条件の受容」）をもとにした前著、『アニメーターの社会学——職業規範と労働問題』（松永 2017）で注目を集めた新進気鋭の社会学者である。前著ではインタビュー調査を通じてアニメーターたちの職業規範のあり方（職人的規範とクリエイターの規範の存在と前者の優位性、それらの利用のされ方と労働条件の受容のメカニズム）を明らかにした松永であるが、本人が「インタビューに専ら依拠したことによる限界がある」、「現場でなされている実践を直接観察し分析する必要があるだろう」（松永 2017: 229）と述べている通り、その調査手法もつ限界については意識的であった。参与観察を中心に据えたフィールドワークをベースにした本書（2018年度の博士論文「アニメ作画スタジオにおける経済活動と空間的秩序——職場のモラル・エコノミーの社会学的研究」がもとになっている）は、前著の課題を乗り越えようとする意欲的な作品であるとともに、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で「集まること」が困難になった時期に「集まること」の意味を正面から問うた、極めてアクチュアルな作品でもある（もちろん執筆当時、この状況を本人は予想していなかっただろうが）。

前著では、緻密な調査とともに、マイケル・ブラウ



●ナカニシヤ出版
2020年3月刊
A5判・204頁
本体2800円＋税

●まつなが・しんたろう
企業情報学部助教。
公立大学法人長野大学

オイによる古典的な研究から職業規範について扱った近年の日本の労働社会学における数々の研究までを手際よくまとめ、自らの立ち位置を明確にした先行研究のレビューについても感心させられた。本書でもその手腕は遺憾無く発揮されている。

序章にあたる「アニメーターの労働への新しい見方」では、まず、先行研究において、アニメーターの労働について組織を捉える視点が欠如していることが示される（第1節）。アニメーターは大半がフリーランスであるにもかかわらず、スタジオに集まって働いている。そこから、彼らがいかにして「仕事に関する自由」と「集まって働くこと」を両立させているのかという本書の論点が導き出され、それを可能にする「職場の道徳性」を捉えることの重要性が示唆される。第2節では、職場の道徳性に関する先行研究が紹介されるのだが、特に紙幅が割かれているのが、アシュリー・ミアーズによるVIPクラブにおける若年女性の不払い労働についてのエスノグラフィである。松永は、ミアーズの研究を、「仕事に直接関わらない職場外のやりとりでも同意生産が行われることを示した点で重要であるが、そうした同意が破綻する際の実践の記述が十分になされていないために、本来の関心であるはずの不払い労働への批判がうまく構成できていない」（pp.34-35）と指摘する。第3節では、社会的行為の説明可能性と相互反映性に着目し、行為とそれがなされた状況がいかに互いを理解可能にし合っているかを分析するエスノメソドロロジーの視点について検

討され、それこそ、労働社会学における適切な記述の不在を乗り越えるものとして提示される。さらに、本書において重要になってくる「働く場所」に注目した研究として「ワークプレイス研究」が紹介され、その先駆者の一人であるルーシー・サッチマンの「共有ワークスペースの構成」という考えが示される。分析の焦点となるのは、ワークプレイスが組織化されていく際、どのような実践や環境が関与しているかという点である。

会話だけではなく、視線や身体の配置やジェスチャーなどの、非言語的な行為も分析の対象となる。さらに参加者が用いている、あるいは参加者の行為の環境として働いている空間、備品、道具なども分析の対象である。こうしたさまざまな分析対象を考慮に入れつつ、その状況下における行為者の行為と環境がいかにして相互反映的に組織化しているのが分析上の焦点となる。(p.27)

実践の詳細を通して達成される秩序を記述すること。それこそ、職場や労働がどうあるべきかを語る規範的な議論の基盤を用意するものである。「本書においても、とくに成員間の空間の使用に焦点を当てつつさまざまな実践のなされ方を記述することによって、現状のアニメーターの労働問題を考えていく際の準拠点を提供することを目指している」(p.34)と筆者は述べている。

以上のレビューを踏まえた上で、第1章ではアニメーターの労働者としての基本的な情報(雇用形態上は独立自営業者であること、他職種も含めた分業システムのなかで、スタジオに集まって働いていること等)、第2章では本書の議論の理解のために必要な情報(調査の概要やフィールドワークをおこなったX社の人員構成、職場のデザイン等)が確認され、第3章以降、分析がはじまる。

第3章ではX社における生産活動(アニメーターの作業の進め方と協働のあり方)、第4章では労務管理(マネージャーの役割とアニメーターとの協働の達成)、第5章では人材育成(社長やOBから若手、先輩から後輩への指導等の技能形成のあり方)が分析され、第6章では、仕事上の会話以外も含めた職場の成員の空間的秩序の遂行が分析される。

第3章から第6章で行われている分析はどれも魅力的なものであるが、冒頭でも述べた通り、コロナ禍で様々な業務がオンライン化されるなか、X社で行われている実践がリモートワークにおいても可能なのかと考えることは、本書のアクチュアルな意義を論じることにつながると思われる。そのため、そのきっかけとなりそうな「空間の使用」に関する分析をいくつか紹介したい。

まず、第5章で紹介されている、先輩から後輩への指導の際の空間的編成についての分析を見てみよう。松永は、指導を受ける側(後輩)が指導を与える側(先輩)の作画机に赴くのが一般的である中、そうっていない状況(指導を与える側が指導を受ける側の作画机に赴く状況)に注目し、次のように述べている。

ここでなされているのはあくまで用件をもった者がその用件の相手のところに移動するということであって、作画机についている他者を移動させないということなのである。これもまた、用件をもった者が用件のある相手の机に移動するという活動を通してそれぞれの作画機の個人的空間としての規範的意味を維持する活動になっている。(pp.121-122)

用件のある者が相手の作画机に赴くという身体性を伴った行為によって、作画机を個人的な空間として維持するという志向が共有されていることが確認される。このことは些細なことに見えるかもしれないが、そうした身体的な動きの積み重ねこそが、この職場の規範を形づくっているのである。

続いて、同じく第5章で紹介されている、社内に設置されている「上り棚」についての分析を見てみよう。上り棚はX社の通用口を入れてすぐの場所に配置されており、そこには他社への引き渡しのため、アニメーターが完成した原画などが置かれているのだが、X社の成員は、そこに置かれているものを見て、技能形成の役に立たせることが出来るのだと言う(それはアニメーターにとっての貴重な「学習の場」である)。重要なのは、それが他者に見られないように「非公式」に行われているという点である。それは上り棚の置かれている場所(作画机や事務室からは見え

ない場所にある)や他者の原画を見るタイミング(トイレや飲み物を取りに行くついでの短時間に見る)など、「空間的編成への成員たちの配慮を通して、公的に成し遂げられる事態」(p.129)である。

第6章は、全体が空間の使用に関する分析となっているが、その中でも特に興味深いのが、「キッチン側テーブル」と「応接室側テーブル」でなされる会話についての分析である。奥まったところにあるキッチン側テーブルは、多様な会話の許されるところであり、一方の、人の往来の多い応接室側テーブルは、テーブルに配置された資料の範囲内で会話がなされることが多い。それぞれによって、会話の目的や解決される課題が異なることが、分析では示されている。

コロナ禍において「雑多なコミュニケーション」をいかにとるかは、オンライン業務の課題のひとつとしてしばしば問題になっているが、この分析からは改めて、職場においてはこうしたコミュニケーションが、空間や身体の使い方も含めて、極めて効率的になされていることが分かる。

本書は、以上で紹介したような、「コミュニティの維持と物理的な集まりの形成が密接に結びついている」(p.170)ことを示す魅力的な事例に満ち溢れている。こうした事例から、我々は本書のテーマである仕事に関する自由と集まって働くことの両立が、いかに

身体を動かすか、いかに物を使うか、いかに空間を使うかといった、「集まること」のなかで達成される様々な技法の集積のなかではじめて可能となっていることが分かる。と同時に、それが身体的な動作や物、空間の利用を伴わないオンライン上のコミュニケーションのみで成し遂げることが極めて難しい(もしくは非効率的である)ことも理解できるだろう。

その意味で、本書は、業務のリモートワーク化が進む中で人々が「何か足りないな」、「何かやりにくいな」と感じる「何か」を、理論的に、経験的に埋める、まさしく今、社会学者に求められている仕事と言える(本書のアクチュアルな意義は、ここにある)。欲を言えば、本書で得られた知見の普遍的な応用の可能性について、もう少し触れてもらいたかったという思いはあるが、それに関しては、筆者の今後の作品を楽しみに待ちたい。

参考文献

松永伸太郎(2017)『アニメーターの社会学——職業規範と労働問題』三重大学出版会。

あべ・まさひろ 甲南大学文学部社会学科教授。労働社会学専攻。